



## 現場が持つ力を信じて

努力を積み重ねるほどに、かえって課題の解決から遠く離れ、問題はさらに膨らんでしまう、と感じることは多い。教育改革然り、地方創生も然り、アベノミクスも経済再生に力を入れるほどに先人たちが蓄積してきた大切なものをぶち壊すばかり▼自らの話である。この一年強、尺八のプロ、名人のレッスンを受けているが、師にはまったく頭が上がらない。「力を入れれば音が出るわけではない。最適なポイントにはまれば力なぞいらぬ」  
「力を抜いて、楽に、トンビが空に浮いているようなイメージで」「意識もせず、音を解放してやったときに心地いい音になる」話は理解できるものの、いざ吹いてみればまったく変わりはない。長く暗いトンネルをとぼとぼ歩いているというのが実感だ。「よけいなものを捨てる。何もいらぬ。息を入れれば尺八は勝手に鳴ってくれる」との師の言葉がいつも頭の中で鳴り響く▼そんな自らに語る資格はないが、世の中、先生やコンサルタント等、教えたがり屋が多すぎるとともに、そうした連中の言葉をありがたがるくらいが強すぎるように思われてならない。理論ではこうだ、ここではこのモデルを適用すべし等々、理屈に現場を合わせよ。それで結果がままならなければ、悪いのは理論どおりやらない、やれない現場が悪いとされて終わり。本末転倒もいいところだ▼現場には現場の事情があり、その解は現場にしかない。現場にいる一人一人ができることをやるところからしか始まらない。現場が持つ力を信じて、これを引き出していくことが肝心だ。

(土着菌)